

## 復活節第四主日

2015. 4. 26

ヨハネ 10・11-18

呉 大一（ヨセフ）神父

今日は復活第四主日です。全世界の教会は、復活第四主日を「世界召命祈願の日」として過ごすのですが、韓国では「召命主日」と呼ばれています。召命とは、神様の召されを意味します。だから今日は特に、神様のお召しに応答した聖職者、修道者のために祈ります。ところが、召命はただ聖職者と修道者のみに当てはまるものではなく、わたしたちみんなにも当てはまるものです。問題は、そのような神様のお召しに、わたしたちがどのように応答するかということです。

わたしは2005年に司祭叙階を受け、今年でちょうど10年になりました。わたしは他の大学を卒業して、会社員として働き、神学校に入ったので、人々がわたしになぜ司祭になったのか、そして司祭になるためにどんな特別な召されを受けたのかを尋ねてくる場合があります。しかし、その質問に対して、一言で答えるには本当に難しいです。召命に応じたと言って、明確に神様を体験できるわけでもなく、また、一晩で突然人が変わるわけでもないからです。日常生活の中で神様の召されを微かに体験してそれを信じるだけです。

わたしは、神学校に入る前に、召命について悩んで、召命主日に一人で神学校に行きました。韓国の神学校では、毎年召命主日ごとに、一般の人たちに神学校を開放し、様々なプログラムが行われ、その中で召命に興味がある人を対象として、召命相談をしてくれるプログラムもあります。それでわたしは召命相談を受けに行ったわけです。ところが、掲示板に貼ってある神学生たちの一日の日課表を見て、あまりにも大変な日程にあきれてそのまま帰って来た覚えがあります。

しかし、結局、神学校に入るようになり、今、こうして司祭になりました。しかし、司祭になったとしても神様の召されが終わったことでは決してありません。

なぜなら、神学校の低学年の時は、果たしてわたしが司祭になることができるだろうかと悩んでいたし、学年が上がるにつれ、このまま司祭になっても大丈夫だろうかと悩んだり、司祭になった今でも、果してわたしが司祭としてよ

く生きて行くことができるだろうかということについて悩んでいます。このように、神様の召されとは一生の間、ずっと悩み、応答すべきものなのです。

しかし、「わたしの後に従いたい者は、自分を捨て、自分の十字架を背負って、わたしに従いなさい」（マルコ 8・34）とのみ言葉のように、わたしたちが神様のお召しに応答するためには、自分自身を捨てることのみ可能です。だからフランシスコ教皇は、今年、第 52 回召命主日を迎えて発表した談話文で、召命への応答の核心は、まさに「脱出」と言われておりました。

まず、「脱出」という言葉は、エジプトで悲惨な奴隷生活をしていたイスラエルの民を救うためにモーセを通して、神様がご自分の民を解放なさり、続いて約束の地に引き寄せたことを連想させます。「出エジプト記」は、救いの歴史全体の話盛り込んでおり、また、キリスト信仰の根本的な力を説明しています。実に、奴隷生活をしていた昔の人間から脱して、キリストの中で新しい生活に進むということは、信仰を通して、わたしたちに起こった救いの業であり、このプロセスが、真の「脱出」と言えます。

すべてのキリスト者の召命のもとにはこのような信仰の体験があるものです。信仰は、安楽さと頑固さを捨てて、自分自身を超えて、イエス・キリストをわたしたちの生活の中心に置くことです。また、旧約聖書のアブラハムのように、自分が住んでいた所を離れ、神様が導かれる新しい土地に向かって、信仰をもって前に進むことです。神様の召されを受けてキリストに従う道に出た彼らは、神の国のために自分自身を完全に出して委ね切って、豊かな生活を見出します。「わたしの名のために、家、兄弟、姉妹、父、母、子供、畑を捨てた者は皆、その百倍もの報いを受け、永遠の命を受け継ぐ」（マタイ 19・29）とのみ言葉のように、召されは神様の深い愛に根ざしを置くことです。最終的に神様の召されとは、神様の愛へのご招待であると言えます。そして、その愛は、わたしたちを魅了して、わたしたちを自己中心から抜け出すように導き、「自分だけを求めさせる閉じられた自我から絶えず離れ、他人に自分を与えることで本当の自分を発見し、まことに神様を見つけることができるように導いてくれます」。（「神様は愛です」6項）

このような脱出の行動は、単に召された人々だけではなく、教会全体の宣教と福音化の活動にも繋がります。教会は、世界に進む教会になる際、たしかに主に忠実するはずです。

そのような教会は、教会の組織と成功を心配するよりも、神の子たちがいるところならどこにでも訪ねて、その人々を満たし、傷と痛みを分かち合うこと

に、多くの関心を払うものです。神様がご自分の民が泣き叫ぶ声を聞いて、彼らの解放のために活動されたように（出3・7）、まさしく教会もそのように活動をするように召されたのです。教会は、すべての人々に会うために進み、福音が宣べ伝えている解放のみ言葉を人々に宣言し、神様のお恵みによって人々の霊魂と肉体の傷を癒し、貧しい人々を慰める、そのような教会に成らざるを得ないのです。

それで、「世界の被造物は、神の子たちの現れるのを切に待ち望んでいます」（ローマ8・19）と、神様は、今この瞬間もわたしたちに熱心に呼びかけておられるのです。

だから今こそ、わたしたちは神様のお召しに応答するときです。ただし、たとえ聖職者や修道者でなくても、神の子として、わたしたちにゆだねられた神様の使命を忠実に果たしていくべきです。

一方、マザー・テレサは自分自身を主がお書きになる小さな短い鉛筆であると言われました。短い鉛筆は、ひょっとしたらゴミ箱に捨てられるほどの、何も役に立たないもののように思われますが、主がお使いになられようとするのなら、どんな鉛筆より、書き込むことが出来るでしょう。

このように、主がわたしたちをどんな形の道に召されておられるのか、主のお召しに耳を傾け、そのような主のお召しに喜んで応答することができますようにお恵みを求めなければなりません。

もちろん主のお召しに応答することが決して容易なことではありません。旧約聖書の多くの預言者たちも神様のお召しを受けて最初は恐れしました。しかし、最終的には神様に対する信仰でお召しに応答しました。

また、すべての召命の模範であられる 聖母マリアは、主のお召しに「み言葉どおり、この身になりますように (Fiat)」とお答えになることを決して恐れていませんでした。聖母マリアはいつもわたしたちと一緒におられ、わたしたちを正しい道に導いてくださいます。聖母マリアが信仰から出る大きな勇気で、ご自分を低くし、ご自分の人生の計画を神様に完全に委ね切られたように、わたしたちも神様がわたしたち一人ひとりのために用意されたご自分の救いのご計画に、わたしたち自身を完全に委ね切ることができなければなりません。聖母マリアがわたしたちのすべてを保護し、わたしたちのすべてのために取り次いでくださいますように祈ります。アーメン。